

東京大学史料編纂所蔵

十六世紀中国被虜人の日本記録『海国生還集』について

劉 洋

一 はじめに

本稿の目的は、一五六二年に倭寇により拉致され、薩摩の南林寺で三年間滞在した後に帰国した中国人・蔡景榕の著作『海国生還集』を紹介することである。本書には福建師範大学図書館所蔵の道光二十八年（一八四九）刻本（以下、福建本）と東京大学史料編纂所蔵昭和三年（一九二八）写本（以下、東大本）が存在する。筆者は福建本を底本とした中国語注釈本を台湾秀威出版で出版予定であるが、より広範な読者層へのアクセスを考慮し、本稿では日本語読者を対象に、東大本の翻刻および解説を行う。

蔡景榕は、いわゆる倭寇被虜人の一人である。被虜人の存在およびそれに関する研究は、二十世紀初頭から日本の研究者ら（秋山一九三二¹⁾、石原一九五六、関一〇〇二²⁾等）によって網羅的に紹介されてきた。本稿ではこれらの研究成果を繰り返して述べること控えるが、従来の研究者が主に依拠してきた史料が『朝鮮王朝実録』や『明実録』などの権力側によって編纂された官修史料であったことは指摘に値する。この傾向の一因として、壬辰戦争（文禄・慶長の役）期の朝鮮知識人による被虜記録や朝鮮通信使の来日行録が存在する一方で、倭寇期の被虜

人による個人的な記録は皆無であると考えられてきたことが挙げられる。したがって本稿で紹介する『海国生還集』は、倭寇被虜人に関する記録の空白を埋める貴重な一次史料として位置付けられよう。

以下では、翻刻に先立って、東大本の伝来と内容、蔡景榕本人の経歴及び本書の成立について、解説と考察を試みたい。

二 蔡景榕について

蔡景榕の人物像は、万曆四十八年（一六一〇）成立の明の文人・何喬遠の『閩書』に以下のように記されている。

蔡景榕字尚秀、幼聰穎不作俗態。嘉靖辛酉歲、被虜入日本者三年。禿頭跣足、吟詠自如。有番僧俊可憐其才、送商船以歸。万曆間以貢授興化訓導、歷官香河・興國・隨州、率以正大表儀。多士林居詩酒自娛、趨迎不染所箠。有『海国生還集』行世。

その他、『寧徳県志』、『福建通志』等の地方志、明末の謝肇淛による『長溪瑣語』にも、蔡景榕の被虜経験が記録されている。二〇二三年夏、筆者は蔡氏の後裔を訪問し、『蔡氏族譜』を閲覧する機会を得た。その記述によれば、蔡景榕の字は尚秀、号は同野である。³⁾福建寧徳県の出身で、父蔡三溪は早年に家族を連れて寧徳城外に移住し商売を営み、

修職郎を授けられた³⁾。景榕は幼少より詩を好み、若くして生員となった。家譜および地方志などの史料では彼の生年月日が明記されていないが、『海国生還集』の序文から、被虜時に「年僅餘廿」であったことが分かる。『乾隆寧徳県志』には「六十告帰、卒七十二」と記されており、さらに蔡氏は万暦戊戌孟春（一五九八年一月）に隋州旧書院で自序を執筆していたことから、一五九八年から一六〇二年の間に辞官したと推測される。

三 東大本の伝来と内容

東大本（請求記号・二〇四五七）は全十九丁から成り、原本の一部の内容のみが書写されている。扉頁には「明治卅三年九月宗現所贍写之」との記載があり、末尾には「右海国生還集大坂市北区西寺町寒山寺細野南岳氏所藏昭和三年八月写了」と記されている。筆者の調査によれば、ここに登場する「宗現」と「細野南岳」は共に明治後期の日本臨濟宗妙心寺派の僧侶である。「宗現」の本名は河尻宗現であり、両者は明治三十年（一八九七）に台湾へ渡り、同地を中国南部への布教拠点としようと試み、一八九九年十一月には福州に赴き布教活動を展開した⁴⁾。

東大本は、河尻宗現と細野南岳の福州滞在中に発見されたと推測される。後に細野が大阪寒山寺住持となり、写本も同寺に伝えられた。一九二八年に史料編纂所の研究員が再度書写した。筆者の調査によれば、第二次世界大戦中の空襲で寒山寺の書庫が焼失したことが判明したため、東大本が、現存する日本唯一の写本である可能性が高い。

福建師範大学図書館所蔵刻本（以下、福建本）と比較すると、東大本の内容には当時の書写者による取捨選択が見られる。重刻序（一八四九年）、原序文（一六〇四年）、自序（一五九八年）は欠如しており、題辞に関しても、福建本は謝章鋌と劉家謀の題詩に加え、『閩書』、『邑志列

伝』、『長溪瑣語』、『鶴場漫志』の内容を収録しており、東大本は『長溪瑣語』のみが収録されている。一方で、本文は福建本と同じく「上興化太尊錢春池状」と題され、蔡景榕の被虜から帰国に至るまでの経緯が詳述されている。続く「計開」では日本の地理、文化、社会等の広範な情報⁵⁾が記録され、南林寺滞在時の詞一首も収録されている。特筆すべきは「附記日本夷語」の一四三語で、薩摩方言らしき特徴を含み、十六世紀の日本語資料として高い価値を持つ。福建本の付録には旧作及び贈詩一三五首が記載されているのに対して、東大本では、南林寺で詠まれた一首のみが残されている。

東大本は福建本の一部を選択的に書写した二次的資料であるが、本文と言語資料の大部分を保持しており、『海国生還集』の核心を伝える貴重な史料としての価値は高い。

四 成書年代について

『海国生還集』の正確な成書年代は不明確だが、散見される情報から推測が可能である。蔡景榕は自序の中で執筆の契機について以下のように述べている。

歲壬午、拜官興化、恭逢太尊春池錢公：聞余從夷島還也、乃命纂進土風：遂錄之進標、曰「涉夷紀畧」。

ここで言及される太尊春池錢公とは当時の福建興化府知府錢順徳（一五三五～一六〇〇）である。そして原序作者の黃巍は序言に「万曆甲辰又九月穀旦（万曆三十二年・一六〇四）」という日付を残しており、また、蔡景榕の子、蔡世寓が書末の附録に「万曆三十二年九月男世寓謹識」と記している。これらの情報から、蔡景榕は一五八四年に最初の原稿を執筆し、一五九八年に書稿を再整理した。最終的に一六〇四年九月に、蔡世寓が父の旧作および友人からの贈詩を統合し、出版したと推測

される。

注

- (1) 秋山謙蔵「倭寇」による朝鮮人・支那人奴隷の掠奪とその送還及び「売買」(『社会経済史学』第二巻第八号、一九三二年、八一―一八三頁)。石原道博「倭寇と朝鮮人俘虜の送還問題(一)」(『朝鮮学報』第九輯、一九五六年、六七―一〇二頁)。「倭寇と朝鮮人俘虜の送還問題(二)」(『朝鮮学報』第十輯、一九五六年、四七―八二頁)。有井智徳「十四・五世紀の倭寇をめぐる中韓関係」(『高麗李朝史の研究』国書刊行会、一九八五年、四二五―五一六頁)。関周一「被虜人の境遇と送還」(『中世日朝海域史の研究』吉川弘文館、二〇〇二年、二〇―五三頁)。川越泰博「倭寇及び被虜人と明海防軍」(『史林』第七七巻第三号、一九九四年、四二六―四四三頁)。
- (2) 県志には字が同野と記載されているが、蔡氏族譜の記録によれば、字は尚秀、号は同野とすべきである。
- (3) 『歴代紀』(寧徳市姓氏源流研究会蔡氏委員会所蔵)四頁、『寧徳蔡氏福房支譜』二十三頁参照。
- (4) 日本臨済宗妙心寺派の台湾布教に関しては、以下を参照。松金公正「日本統治期における妙心寺派台湾布教の変遷―臨済護国禪寺建立の占める位置―」(『宇都宮大学国際学部研究論集』第十二号、二〇〇一年、一三七―一六二頁)、林權嫂「臨済宗妙心寺派在台北教史(一八九五―一九四五)」万巻楼、二〇一九年。

【翻 刻】

凡例

- 一、底本には東京大学史料編纂所蔵鈔本を用いた。
- 一、旧字体・異体字はおおむね常用漢字に改め、読点を適宜加えた。
- 一、底本と他本で異なる字句等は、本文に番号を付し、対校注に示した。
- 一、基本注釈は割愛するが、人名等については()を付して示した。

海国生還集

明治卅三年九月

宗現所謄写之

蔡景榕者、寧徳県諸生也、頗能詩。嘉靖辛酉五月、倭破県城、擄之歸。至西海道薩摩州鹿島郡。髡其首、奴使之、困若備極、求死不得。閱兩月、売与肥前州商、得錢八千文而去。至八月朔、随往松源山南林寺、老僧(得翁後可)俊可異而詢之。景榕書大明秀才示之。僧因試以芙蓉詩、景榕援筆立就曰「風来翠蓋動、露滴霞杯濃。不与春芳競、秋江独逞容」。僧乃留之寺中、命録書經典及太平記、倭国玉篇等書。逾年、景榕求歸甚切、僧与眾議欲妻之、且給以田。景榕題雁詩於便面曰「金風瀟瑟碧天秋、浅水平蘆亦覽游。万里青霄終一去、野鳧無計漫相留」。僧知其意、不復強之。然倭頻年入寇、無便可歸。癸亥春、乃潛命畜豕。甲子春、有漳州通番船至、懇於僧得附歸。聞於官仍復書生、後以歲薦。官至隨州(長漢瑣語)廣文。

海国生還集

上興化太尊錢春池狀(錢順徳)

霍童 同野蔡景榕著

景榕、嘉靖辛酉、鼎遭倭陷、明年五月初九日、身被倭擄、幾見害。限三日贖金、倉卒⁽¹⁾不辦、值南風超⁽²⁾、即驅而入之夷矣。五月十三日發舟、本月廿日到。問之、為日本国西海道薩摩州鹿兒嶋郡也。賊至家、則於榕髡其頭、跣其足、食以糠核、寢之下牀。時六月溽暑、早禾熟、晚禾正耘草、勒與同事事。孱弱力弗能任、顧董楚之加、無奈何、直欲求一死、而彼又斬一刀也。閱兩月、則畧完与肥前州客商、得錢八千文而去。夫商人初未知榕之為儒流也。明日、八月初一、随往松原山南林寺、謁一老主持僧俊可。蓋倭之知詩書者惟僧、而人之所敬礼者亦惟僧也。是時語言不相通、俱以書代言。求紙筆、書「大明秀才」数字進。彼以秀才為翰林中人、未有不善訪者、⁽⁴⁾速面試以芙蓉。時急、強韻以応之「風來翠蓋動、露滴霞杯濃。不与春光競、秋江独逞容」。僧目商人曰「是秀才矣。我当留之寺」。

出錢還之如其數焉。寺中無他委、惟抄写已。凡写有「太平記」、「法華經」、「大般若經」、「倭国玉篇」、「大学」、「中庸」白文等部是也。勤慎承事、頗為所愛惜。僧歎三十余人、称詩礼者八九僧、幸相視若弟兄。然間嘗以榕思婦情達住持。住持曰「吾得言於薩摩州、俾妻之、田産之、以安其心、慰其心、而胡以思婦勤也」。榕聞之、故示意於使面之景「金風滿瑟碧天秋、浅水平蘆亦暫游。万里青霄終一去、野鳧無計漫相留」。住持喻意、且進諸僧而言「知彼婦心切矣。吾崇仏教、慈悲普施、何惜八千錢、而拘人於吾地、使其愁苦呻吟、有似我之荼毒者耶。然所以欲留之

者、念我国人擾彼国未靖也。歸而不虞、何如勿歸。少待之、須送琉球、与其好婦、令而父母妻子恩我也」。癸亥春、命畜髮、為婦計。癸亥秋、髮尚短、即懇求附倭子船回、住持甚慮船人不妥且殃及、弗之許。甲子秋、有漳州通蕃船至、復乞婦、復以船人不妥見慮、属之覓、漳人乃素來販者、知其無害、欣然許之。置酒志別、榕遂解脫、離倭境、乘漳人張姓者之船歸焉。計開船時、九月二十一日、到月港則十月二十日也。具狀上中丞南溟汪公。^(注道昆)学憲鳳阿姜公憐其狀、准照旧補充廩生、復得与衣冠之会矣。今幸就微程感恩作養、恭承顧問、故具生還之由而紀倭中睹記之畧于左。

計開

夫日本、東南夷也、都大倭之地、又謂之倭。有七道六十六州、皆以州統郡。州郡之長、皆以世相繼、非以德舉、非以言揚。大都以武勇校算為高、而誦詩說書之務、則見以為迂遠而不切於事情。其知吾儒書者、乃属之治仏書之僧。僧之文学、冠一寺冠者則為一寺之主持、所以選扱而使之、⁽¹⁰⁾則皆裁於州郡之長。其農工商賈之子、恒為農工商賈、亦各有定業。其來寇、俱係西海道肥前州、肥後州、豊前州、豊後州、石見州、薩摩州、日向州、大隅州之人、蓋西海去彼王之畿、関東道遠且四十余日、至吾之地、可六七晝夜到也。其人多是海邊販閱者、市廛貧惰無賴者、力農圃之夫、与夫有田産之豪、亦皆奉公守法不盜為也。大抵土瘠人貧、性且狡詐、易於為盜要之引誘、嚮導之罪、則有在此不在彼者矣。

- (1) 福建本「猝」。
- (2) 福建本「起」。
- (3) 福建本「床」。
- (4) 福建本「詩」。
- (5) 福建本「遽」。
- (6) 福建本「芳」。

- (7) 福建本「且」。
- (8) 福建本「番」。
- (9) 福建本「冠一寺者則為一寺之主持」、
- (10) 福建本「使」。

夫尊卑貴賤之相臨、亦有禮法以相守。如芸夫、牧豎與盛服佩劍者、途遇卒遇也、則匍伏於傍俟、其過而後起。如位分相敵者遇彼此、俱稍屈其腰、兩手合掌至臍下以為揖禮。如位分一尊一卑者、遇卑者則去其頭上之笠、脫其足下之屨、俱執之手稍屈其腰、遑遑然走尊者之傍而過、不敢与抗。礼尊者從中行、稍屈其腰、合掌至臍下以相待。如造人家、則先脫屨於寮前、卸其佩刀於側、屈膝至其中之席地、跪伏地致意、礼畢而坐、則茶焉。至於有所爭也、理之曲直皆聽斷於州郡之長、無竹刑鞭笞之具、理非罪重者殺。居夷時見有頭目人好遊蕩、置之僧寺、三個月秃髮鬚鬚長、亦不敢擅自剃沐、必待命釈之而後歸。亦曾見賭博撒酒人、而戮之市者。然而來寇不禁、何也。蓋用所盜之物歸之所屬之酋、有利矣。且以夷寇華、自彼視之不啻如秦越人之視肥瘠也、何為禁之哉。夫男女之生孩提時、俱留其髮而不削。但男子年登十五六、則削其髮而鑷之、存鬢刃及頭後髮少許、而無冠冕削髮則為成人矣。佩長短二刀於腰、出入不離、非徒利擊刺、亦以示觀美。多有貧不能置者、欲出則從人假借之。女子不佩刀、束髮於頂、而濃其鬢、無首飾、或多散其髮而不束、蓬蓬然垂之背而已。亦脂唇粉臉、但必欲黑染其齒以為媚焉。嫁娶都憑媒、富厚之家用茶餅酒礼不用錢財、亦自少小時議親。貧賤必拘錢財而成婚、隨其人之醜好、以論財之多寡。其未許嫁之処子、人猶可無忌之。一有定偶、不可乱、乱則刀刃相加矣。若夫設形容而心挑目招者、則酒嚮中侍兒之奔富厚者也。

夫宮室以安身也。其式則雜木為柱、員竹為椽、覆以茅茨、束以索綯、鋪地上以薦席、四圍剖竹牢障、仍編茅束密以蔽風雨。牖戶出入以席為門、或上蓋以檉板、而環蔽亦以檉板。如『詩』所謂「西戎之俗、以板為屋」。雖倭亦有之、大抵皆簡陋卑狹而非広廈。至其子之有室、又別構以居之。薩摩州之官宇頗多間、茅寮板屋、俱有其中比常人較寬大、無儀門、譙樓、公廡、閣庫之制、亦好似一大家模樣矣。独有福昌寺之

仏刹、高棟橫梁、崇階敞殿、建置規模大類中華之浮屠、然而蓋之亦以板非陶瓦、通國中未見一瓦屋也。

夫衣服以蔽體也。布帛裁幅而直縫、短其袖而殺腰、非上衣下裳之制、男衣短、才至膝。女衣長、曳至踵、俱不有裙褲。束以糸辯之帶、或以色絹包棉紗為帶、而束之。但女衣内幅布橫围下体、而著其衣。出遊時、又将一衣從頂蓋下、披於所著衣上。男子用花布制一長袴、絡於衣之外、夏亦葛、冬亦裘、知寒暑之宜。若短衣露脛而禁寒者、則習俗慣也。凡綬緞細絹苧葛麻桌、彼地所出、中国所至者、各隨家之貧富以為有無。托足之物、則草履皮屨、男子皆用之、而互寒之時女亦有皮屨也。

夫飲食以養生也。朝饔夕飧、猶古之風。用方盤盛食物、左飯右羹、前蔬磔後安筋置之、席地上坐結跏趺而食之。僧齋素、俗茹葷、僧所飯者、米也、粟也、具精鑿。但每食菜一羹、飯半碗、人定其分、外無所加。酋長頭目之家飲食更豐厚、魚羹水鳥不待買而足。平等之人將殺春籩其殼、去三四、即竟碎春之如糠、然乃足熱水於鍋、放下糠米作糜。凡粟、麥、黍、稷、豆、芋与夫糟粕曬乾、雜豆米炊熟、皆以充飢。飲以羹、遇無菜時、多以苦蓼搗汁和豆醬水飲者。若大会賓客、則先下飯食、半進酒、如僧命行童、俗命侍女、捧大杯跪進、照客位通勸。席有三盤、盤僅四五品、索面饅頭、彼之所謂大会矣。

夫地之產載物類多矣。其葺山隱海之靈物、沈沙棲陸之瑋宝、固未之聞見也。然得於所聞而遺所未聞、得於所見而遺所未見。則言果類有桃、李、梅、栗、梨、柿、橘、柚、楊梅也。花類有蘭、萱、桂、菊、海棠、芙蓉、長春、杜鵑、山茶、水槿也。木類有松、栢、檉、楓、樟、

桑、榆、槐、柳也。菜類有冬瓜、蘿蔔、茄子、菠薐、蔥、韭、薤、蒜、芋、蕨、姜、芹也。禽類有雞、鴨、鵝、雁、燕、鶯、鳩、鴉、鷹、鵲、鷺、鴛鴦、鷓鴣也。獸類有虎、鹿、牛、馬、貓、狸、犬、羊、豕、猴、兔、獺也。魚類大者幾百斤、小者多不知名、所知則鮓、鰻、鰕、鱉、蟪、螺、蟹耳。至若茶、塩、鉄、硝之類、在処有之、即裝載往來不禁也。

夫川谷異制、古記之矣。而倭有七道、京畿、關東等道相接壤。独西海道遠隔一海、又在倭国王化之外。吾名倭之人為狄、倭又名西海人為狄。

是地無甚高山峻坂以上下、而長溪小澗之出入、在在有之。為州郡大去処、亦有數百家。或去三里而居、或去五里而居。無島嶼而没有人烟也。海水色黑、而味極鹹。取而煮之。即成塩矣。鑿井而飲、井水清冽。地常震。一年經有四五次。時有水面石頭能浮、謂之浮石。有松下砂生之菰、謂之松露。有温泉甚奇、在薩摩州之屬地。

夫四民業已聞矣。農則山田種粟、黍、稷、大小麥。水田種稻、有蚤晚、粳糯之分。耕耘收斂事同中国、獲負之、婦椎谷斗量、裹以草包、藏之土窖、而輸其半於其主焉。工芸有駕屋者、造船、漆器具者、鍛刀者、鑄鍋者、造扇者、造筆者、紙者、染色、塑画者、犁、鋤、斧仍有鉄匠、箱櫥、桶、盤各有木工。數項中之頭目皆受田於州郡、而身奉公者也。商賈常往來關、広、球、趾之区、興販綿布、糸絮、砂糖、瓷器、蘇木、胡椒、沈香、紅花、靛青、藥材、脂粉、針剪等物以婦。利市則不啻倍息、折閱則輒起盜心、假生理而作非為者、其商賈哉。若捕魚煮塩、乃滨海居人之生計。若供蚕績、縫衣裳、操井臼、亦彼中婦人之所有事焉者也。

夫倭僧有曹洞宗、臨濟宗者、皆批緇衣之制、与中国同、有田産、不自服力。蚤朝登堂、奉經畢而退。知字者習字、知詩者誦詩、不能者群居昼寢、或逐市閑行。書籍僅有。拋所見、有『五經』、『四書』、『性理』、

『通鑿』、『漢書』、『三国志』、『韓柳歐蘇古文』、『李杜詩全集』、『唐賢三体』、『草堂詩余』、『蒙求』、『金鑒』、『日記故事』、『事林広記』、『列傳』諸書。但俗尚在詩四六次之、而時議論策在所弗識。故聰明顯攻者以『唐賢三体』為本領、詩韻最熟、稍出入則嗤笑矣。彼頭目之子、有從之問字學書者。至於人喪殯忌辰、多請之作功果。亦有精於醫術而能療人病者。四月十五為結夏日、則閉門誦經。七月十五為解夏、則群出縱遊。此二宗之僧、人人尊重之。有一樣僧身穿玉白色、偕削髮未削髮之尼混一寺而居、名為道場。又一様僧、背負仏龕徧遊六十六州、到一州則收買其州人所写法華經一部、其經紙長三寸、細書捲之、可兩指圍、各州收完然後歸。臨終時以此經殉也。道場之僧、人所輕視、乃收經者其似遊方化縁之流与。

夫倭居海島、地属東南。春發梅花、冬存綠葉、四時之氣大与甌越閩広相通。然而颶風烈烈、則時時有之。若雨雪紛紛即淹、三年而未一觀也。霜寒亦凝、水不甚冰、夏月恒旱乾、禱雨於靈感觀音寺、有応哉。至其歲時伏臘之礼、則又窃聞中華之風声、而自為外夷之習俗者也。正月賀年、多以酒矣。而上元、罕灯燭之張。清明奠墓、止用茶矣。而中元盛蘭盆之会。端午包角黍懸艾以避邪、而鬪舟之戲弗見也。七夕食桃仁、穿針以乞巧、而淘井之事兼行也。時值中秋、乃剖瓜蒸芋以獻明月。節臨重九、亦嚼萸酌酒以對黃花。当三伏之辰、則尽日不理他事。逢庚申之夜、則焚香直守黎明。冬至、作糰餅以持贈下戶。寂寥除夕、燎柴竹以為光、大家欣慶。

夫飽煖逸居之徒、每從雜劇、声伎之樂演者、吾謂戲矣、彼不謂戲而曰能。唱者、吾謂曲矣、彼不謂曲而曰歌。元正之時、名為樂戸数人擊鼓敲板、沿門口誦「万歳樂、万歳樂」、連数十声不置、賞之酒餅錢米以去。七月、童子数十人、身穿雜色鮮衣、頭簪紙剪綵花、背後挿一長大掌扇、懸小鼓於胸前、兩手從旁擊之、笑叫、跳躑、後先追隨、月朔至

月終罷也。出有入無、吐丸穿鼻者、則謂法家。刻木穿糸、手提口唱者、亦謂傀儡。瞽子撥琵琶以說故事。曾豪市僧則能彈二弦四弦之聲焉。好双陸、善圍棋、賭拳爭采、蒲搏大呼、一擲而決成敗於須臾者、倭豈少斯人哉。¹²

夫書契之興、倭所從來久矣。有『和漢合曆』、和者倭也、漢謂中國也、合曆謂曆之歲次。某甲子是和某代某年、漢某代某年、合而記之。如榕壬戌歲到倭、見曆所記者日本天祿七年、大明嘉靖四十一年也。自唐虞三代遠者無論、即漢以下至大明、其中帝号年号俱不爽、但記年而不記事。有御成敗式目者、即其中之所定律令也。有『太平記』者、為冊四十本、乃記中國及琉球、朝鮮、交趾、暹羅時事。如載唐明皇寵楊貴妃始末至死於馬嵬止、乃中國一事。有三重韻、詩韻平上去入声、彼以平上去三声彙為三重、其刻板之式如

一東

一董

一送

東震方凍夏大雨 董督聾也 送遺也 松鳳也

上重橫列東韻、中重橫列董韻、下重橫列送韻、字尽則列二冬二腫二宋如前式。平声韻三十、上声韻二十九、去声韻二十九、故配為三重、而入声韻十七則另附後焉。倭中自制四十八字、皆與彼音域語相近、全憑此數字而切音中國之字、詩文不用、俗之書札、契券多用也。

夫倭俗相傳、秦時徐福齋童男童女入海求神仙無驗、遂逃之倭不歸、今其国之熊野神而人極崇祀者、即徐福云。嘗觀其『太平記』、見倭於漢時多來朝、歷魏晉宋隋皆入貢、唐時太宗征伐四夷而日本長服、朝貢不斷。嘗有僧往浙之四明学文、如「日東病僧」、¹³「奉秘書監還日本」唐人俱有詩至今。猶知有唐、故謂大明人為唐人也。元時日本不朝、乃癸七

十万艘以征之、將至其国、忽大風起、飄溺人死、後止得一艘回者。洪武初、日本曾以倭刀及扇進貢而許之、但輒入輒殺掠人、永樂年惡其狡詐恐窺中國虛實、遂絕其貢。昔時入貢使者有詩曰「国匪中原国、人同上土人、衣冠唐制度、礼樂漢君臣、銀甕新酒、金刀切網鱗、年年二三月、桃李一般春」。其言信不誣矣、然所謂衣冠唐制度者、或昔是而今非、或京畿等道猶然、而西海之狄未必然、又未可知也。

夫莊舄仕楚猶聞越吟、以孤身而羈海外、誠不能忘父母兄弟妻子之思矣。故庚申守夜、因倭之俗焚香致祝。情見乎詞云「父兮父兮在高堂、憔悴將教兩鬢霜、臨老不堪經世乱、避時何計度年荒、遙念着、便心傷、踈巔欲展瞻雲眼、滿頃煙波又渺茫、今宵誠信禱穹蒼、炷此香、惟願椿庭福寿康、母兮母兮棄子亡、誰知子亦罹扶桑、生前未獲千鐘養、死後才丁半載喪、心席折淚波汪罔、極慈恩、無以報、終天抱恨豈能忘、今宵誠信禱穹蒼、炷此香、惟願萱闈登福堂、儂兮儂兮細自量、曾從少小業文章、人称邁跡由鉛槧、誰擬髡頭伏劍鋌、到此際、好恓惶、詩書拋却干戈後、蕞爾蜉蝣寄薩陽。今宵誠信禱穹蒼、炷此香、惟願萍蹤歸故鄉、弟兮弟兮總未剛、時逢兵燹日奔忙、母方死別婦冥壤、兄又生離入虜疆、不相見、若參商、鶴鴿原上飛鳴急、鴻雁天边怨淚長。今宵誠信禱穹蒼、炷此香、惟願榮華奕葉芳、妻兮妻兮士女行、想經喪乱亦啣嚙、寄生縱此塵棲弱、繼世還期鳳卜昌、從別後、莫相將、幾回明月清風夜、不聽猿声亦斷腸。今宵誠信禱穹蒼、炷此香、惟願糟糠不下堂、子兮子兮命不良、生來襁褓際兵槍、二句得汝才二歲、一別如今各一方、恩愛刃、割愁腸、帶草春窗留素業、機辺夜雨伴昏黃。今宵誠信禱

(14) 福建本「細」。

(15) 福建本「万」。

(16) 福建本「比」。

(12) 福建本「倭中豈少斯人哉」。

(13) 福建本「畏」。

穹蒼、炷此香、惟願男兒當自強、心香炷罷立迴廊、驟過瀟瀟雨一行、天似有情天亦慘、為予流淚到予傍、雨漸歇、月仍光、寒風颯颯透紗窗、和衣聊假寐魂夢、即還鄉、正敘人間離別苦、寺僧又把曉鐘妨」。

時歲癸亥書於倭之南林寺、而僧亦有為之和者。凡此皆述其畧也。為其境俗性智之優薄、地產物生之區品、山溪道途之險易、氣候涼暑之通隔、器用居養之精粗、內外職事之勤廩、点画声韻之異同、謙謹踴鞠之瑣細、有知有不知、有記有不記、固不能審求根末、備写情形亦非敢奇譎不經而為誣異之說、謹錄進呈、冒塵台鑒、榕不勝感激戰懼之至。

附記日本夷語

天旬尼 日非祿 月都急 風元也 雲姑摸 雷刊眉 雪又幾 霜審摸 霧幾里 雨下米 起風元也付祿
下雪又幾付祿 下雨下米
地只尼 土卒子 河嗒哇 海惡美 山牙馬奴 水民足 路密止 石依石 沙是那 遠它加撒 近只加撒 長拿合矢 短密密矢 東欣加矢17 西弭矢 南米那米 北乞乞 春法盧 夏拿子 秋了幾 冬付由 昼非祿 夜又盧 時吐基 年吐矢 正月昌哇 二月寧哇 三月撒哇 四月升哇 五月午哇 月祿谷 七月式至 八月法只 九月苦哇 十月的 十一月審摸 十二月失哇
茶味 花画拿 米穀米 樹拿急 松馬子 竹捷基 筍捷基 草屈撒 瓜塢利 菜葉 梅梅 香柯 龍 撻都 虎它喇 馬吾馬 牛吾矢 兔吾撒 豬吾哇 狗依奴 皮嗒哇 鼠聶 貓貓 魚依窩 蛇密密 猴沙魯 雀孫思美 鳳凰夫 麟麟夫 孔雀少
刀刀 弓由迷 箭牙盤 八只船 分尼帶 文比畫 葉裔書 付美筆 分支墨 思米碗孫思 紙加 米 香爐 柯扇 扇基 酒鐘 撒嗒 酒沙基 面以 飯闕 頭加米 耳眉 目七 眉馬首 口屈 只牙花 鼻花拿 手支 足惡矢 心各各羅 身度 鬚欣其 金孔加尼 銀口祿 銅加尼 鐵谷祿

(17) 福建本「天」。

錫錫 玉衣石 珠達馬

一 的子 二 蓮子 三 密子 四 約子 五 亦卒 六 木子 七 拿拿子 八 法子 九 靠靠 十 闕
一 錢亦出 二 錢尼門 三 錢衫門 四 錢升門 五 錢吾門 六 錢祿谷 七 錢式只 八 錢法只 九 錢苦門 一 兩 每門 看密止 起去榻止 起來榻止 回去榻多 不敢 撒密 曉的 失達 不曉納民

。附刻舊作八十首之一

南寺餞別

涉世看君倦欲還、行廚萍聚此禪閑。水澄宦況逃川外、鳥語朋情覺路間。法海是曾遊子寺、月峰猶未到來山。堪觀且莫愁林暝、別後必知但夢攀。

右

海国生還集

大坂市北区西寺町寒山寺細野南岳氏所藏
昭和三年八月写了

(18) 福建本「了」。